

室町期における副詞「チョット」の意味—抄物資料を中心に—

深津周太 (名古屋大学大学院 日本学術振興会特別研究員)

要 旨

現代語において程度副詞として機能する「チョット」が、文献史上に姿を現すのは、中世後期以降のことである。現行の理解では、この時期の「チョット」も現在同様に程度副詞であったとされることが多い。これは、当時一般に用いられた「チット」や「ソット」という類似した語形を持つ程度副詞群への結びつけから生じた理解であると考えられる。しかし、「チット/ソット」に比して用例数が極端に少ないことや、その用例が動詞修飾用法に集中していること、さらに【擬態語＋と】という語構成を持つという分析が成り立つことから、室町期における「チョット」は情態副詞であったとの仮説を立てることができる。現に多くの用例は、〈尖ったもの〉の様態および、それによる動作のあり方を音象徴的に表現するものと解釈することができ、仮説に矛盾しない。したがってこの語が程度副詞化したのは、室町末期から近世初期以降のことである。この変化は、「チット」との類義・類音関係によるものであり、ある時点において、両者がバリエーションであると同定された結果生じたと考えられる。

1 はじめに

現代標準語（以下、現代語）における副詞「チョット」は、程度の小ささ（以下、〈程度小〉）を表す副詞である。同じく〈程度小〉を表す「少し」とは文体的差異を以て使い分けられるが、論理的にはほぼ同義と言ってよい。現代語における〈程度小〉を表す副詞は他にも多数存在するため、共時的研究の視野においては、これら類義関係にある語群内における「チョット」の位置付けが問題となるところである¹。しかし、この語が現代語において程度副詞²に意味分類されること自体は認めてよかろう。

一方、語誌的な面に目を移すと、この「チョット」が文献史上はじめて姿を見せるのは、管見による限り中世室町期も後半に差し掛かる頃と思しい。この時期の文献における「チョット」の用例数はきわめて少ないが、その中で、抄物資料には比較的多くの用例が見られる。

従来の見解では、室町期の「チョット」は現代語同様に〈程度小〉を表現する程度副詞だったと考えられている³。しかしこれまで、当時の「チョット」の用例全体に目を向け、その実態を明らかにした研究は見られないように思われる。「チョット」が程度副詞であると判断される背景には、現代語における程度副詞としての性質と、当時〈程度小〉を表現するのに広く用

¹ 三宅 (2003) など。

² 副詞の意味分類として一般的なものに、山田孝雄氏による「陳述副詞・程度副詞・情態副詞」という三分類がある。このような素朴な分類に対し、さらに詳細な分類が必要との提言 (仁田 2002 など) もあるが、本稿の場合、細かな意味分類は必要としない。このことを踏まえて本稿では、抽象的概念としての〈程度〉を表わすものに「程度副詞」、特定の場面に密着し具体的な動作・様態を表現するものに「情態副詞」の名称を、それぞれ用いる。

³ 出雲 (1982) は、「チョット」(及び、「チト」「チット」)につき、「これらの語は、言ってみれば、「性質・情態」の程度というよりは、「動作・作用」の程度をあらわすと言った方が適当かも知れないが、本稿では程度副詞として扱った」としている。いずれにせよ、〈程度小〉とみることに変わりはない。

いられた程度副詞「チ(ツ)ト」「ソ(ツ)ト」⁴（以下、「チット」「ソット」）への形態的結びつけが、前提としてあるのではないだろうか。

本稿では、程度副詞「チット/ソット」との比較を通して、室町期における「チョット」が程度副詞であったことへの疑問を提示する。しかし、この時期における「チョット」の出現は限られたものであるため、用例の帰納をもって十全な意味記述を行うことは困難である。そこで本稿は先に仮説を立て、具体的用例をそれに矛盾せず解釈しうることを確認することによってその蓋然性を示す、仮説演繹的な方法をとることとする。こうしたアプローチは意味記述として不十分である上、客観性を欠くきらいはあるが、室町期の「チョット」を程度副詞とすることに対して再考の必要を訴える本稿の目的は果たしうるものと考えられる。

2 「チョット」は程度副詞か

2.1 程度副詞「チット/ソット」との関係

室町期の「チョット」が程度副詞であったことは、従来、暗黙の了解事項となっているようである。この時期の口語資料において頻繁に使用される程度副詞には「チット」「ソット」がある。そのため、「チョット」の源流を、「ちと」の転（『日本国語大辞典』）とする説もある。

しかし、「チト」>「チョット」のような音声変化は、類例を見出しがたく、蓋然性に欠ける。この点、以下の亀井（1957）の説明は、変化のあり方としては説得的である。

- (1) おそらく古くからの「そと」の強調形「ソット」と「ちと」の強調形「チット」の両方が互に「ちゃつと」にひかれて、ここに「ちょつと」という新しい別形を生んだものであろう。

しかし、この場合も、「チョット」が程度副詞であったことが前提とされている。この解釈の成立には、新たに生じた「チョット」が、その成立の段階において「チット/ソット」と用法面において一致している（バリエーションとしての解釈が可能である）ことが、条件として必須である。筆者はこの点を疑問なしとしない。

本稿では、「チョット」を程度副詞「チット/ソット」のバリエーションとみなしうるかを、検証することから始めていきたい。

2.2 室町期における「チョット」の実態

2.2.1 用例数から窺われる用法上の制限

先述のとおり、室町期における「チョット」の用例の多くは、抄物資料に集中する。そこで

⁴ 厳密には、程度副詞としても用いられたというべきである。例えば「ソット」は、「雨ガソット降ル」という文脈に多く用いられる。これは雨の降り方を擬態語「ソ(ツ)」によって表現した情態副詞である。この文脈では「チット」は用いられず、むしろ「ソロソロト」と言い換えが可能である。なお、程度副詞としての「チット/ソット」がシノニムの関係にあることは、次の用例からも読み取れる。「立秋ハマダ金ノカガユワイソ、ソツト伏ソ、金ノカガユワイホドニマダチツト伏シテカクレタソ」（詩学大成抄、八30ウ）。無論、両者がまったくの同義であったとは言い切れず、本来このような同義もしくは類義関係にある語群の構造についても考察すべきであるが、それについては稿を改めたい。なお、参考までに『日葡辞書』（1603-4）を引いておけば、「Chito. (チット) ちつと. 副詞. 少し.」（原49o, 邦訳p124）「Sotto. (ソット) そつと. 副詞. 少しばかり.」（原378u, 邦訳p578）とある。ただし『日葡辞書』は本稿で問題とする時期より、やや降る。

まず、抄物に見られる「チョット」の用例数を、「チット／ソット」と併せて確認していこう⁵。

次の表 1 には、調査した資料のうち、「チョット」の用例が見られたものだけを載せる。仮に「チット／ソット／チョット」がシノニムの関係にあった場合、「チョット」の用例が見られない資料は、意図的に「チョット」を避けた可能性もなくはない。

表 1 抄物資料における「チョット」及び「チット／ソット」の用例数

	チョット	チット	ソット
史記抄*	1	232	29
毛詩抄*	1	212	39
四河入海*	1	387	125
詩学大成抄	2	37	34
三体詩抄	1	51	4

一見したところ、「チット／ソット」に対し、「チョット」の用例が極端に少ないことが目立つ。これは、「チョット」が存在しない資料も含めれば抄物全体を貫く傾向と言えそうである⁶。「チョット」が「チット／ソット」のバリエーションであったに於ては、「ゆれ」が少なすぎるとの印象を受ける。

この分布から導き出される可能性は、「チョット」は「チット／ソット」に比して、その用いられ方に制限があるということである。

2.2.2 用法から見た室町期の「チョット」

では、抄物における「チョット」と「チット／ソット」の使用には、どのような違いがあるだろうか。本稿は「チョット」の意味について述べるものであるが、具体的文脈における各語の用法の解釈から始めては、客観的な成果は得られない。そこでまず、形式面から両者の違いを明らかにしていこう。「チット／ソット」は多様なパターンを以て出現するが、その全てを挙示することは紙幅が許さない。代表的なものを挙げるに留める。

まず、一般的な連用修飾の例を挙げよう。「チット／ソット」は動詞を修飾することが多いが、形容詞修飾の例も見出すことができる。

- (2) ソノ如ク初ニハチツト思ツタ様モアツタカ後ニ悪ナツタソ (毛詩抄・二 34 オ)
- (3) 七言八句ハ、句ガ長キ程〈ト〉ニ、ソツト分別ガ有トソ (三体詩抄・二の一 1)
- (4) チツトヨイヤウナ事ヲ云事モ有ソ (毛詩抄・十二 8 オ)
- (5) 涼ハ多ハナイソ、ソツト涼イ心ソ (詩学大成抄・五 68 オ)

⁵ 索引類を用いたものには、資料名に*印を付す。『抄物資料集成』の索引による「誤刻・誤脱その他の理由で、底本をあらためた形で採録したもの」も数値に含めることとする。なお、出雲(1982)によると、『玉塵抄』に「チョット」が5例見られる。また『三体詩幻雲抄』の擬態語を調査した劉(2005)には「チョット」は報告されていない。

⁶ ちなみに、調査した抄物のうち、『句双紙抄』、『中華若木詩抄』、『日本書紀抄』、『蒙求抄』、『論語抄』、『杜詩統翠抄』、『漢書抄』、『桂林徳昌講一元光演聞書』古文真宝抄』、『(彦龍周興講某聞書) 古文真宝抄』、『山谷抄』、『莊子抄』、『百丈清規抄』など、多くの資料には「チョット」が見られなかった。一方「チット／ソット」は、いずれの資料にも豊富に見出される。

次に挙げる例のように、数量および程度を表す語につく、「づつ」「ばかり」のような副助詞類や、「ま(くいま)」のような副詞との共起は、「チット/ソット」が程度副詞であることの傍証となるであろう⁷。

- (6) 次第ニチツツ、ヲトロヘタ躰ヲ作タン (毛詩抄・十四 12 オ)
 (7) サレトモ暁ガタニ、ソツトバカリネムリタレハ、正シク我家ニ婦リタトユメミタン (三体詩抄・二の一 45)
 (8) マチツト菜ヲソヘヨト云義也 (四河入海・七ノ三 22 オ)

またこれらの語が、格助詞「の」を伴って、体言相当の要素として用いられることも抄物においては稀ではない。

- (9) 室家カチトノヘタテモナウキヒシウテ其後カ天下ニ及ソ (毛詩抄・十七 19 ウ)
 (10) 一日モソツトノヤウニ思ソ (詩学大成抄・八 14 ウ)

さらに「チットモ」は、述部が否定辞をとる場合に要求される、いわゆる陳述副詞として一語化している。「チットシタ/ソットシタ」も同様に一語化したものと見てよいだろう⁸。

- (11) ミドリ定テチツトモカラヌソ (詩学大成抄・五 16 オ)
 (12) 戸ト云ハ衝翟ノ山ヲチツトシタル扇中ニ書ハ (四河入海・二〇ノ二 13 ウ)
 (13) 細ハソツトシタコトナリ (詩学大成抄・七 27 オ)

以上のように、「チット/ソット」は多様なパターンを以て出現する。挙例は省くが、そのほとんどが「スコシ」で言い換え可能であり、その程度副詞としての性格が随所に窺われる⁹。

これに対し、抄物の「チョット」には、連用修飾用法の例しか見られない。それも、形容詞を修飾する「チョット」は存在せず、もっぱら動詞修飾の例ばかりである。一部を挙げる。

- (14) 角ハ犀角ノ如ニ髪ヲ頭ニチヨツトユウヲ云 (四河入海、四の三 25 オ)
 (15) 一ツマミ程ノ頭巾ヲチヨツトキテイルソ (毛詩抄、十五 12 オ)

もちろん、「チョット」はあくまで連用修飾用法の「チット/ソット」の変異として生じたもので、抄物の時点で他のパターンまでは類推が及んでいない、という可能性もなくはない¹⁰、

⁷ 「Sottozzutçu, ソットツツ (そつとづつ) それぞれに少しずつ. 例, Sottozzutçu vaquru. (そつとづつ分くる) 各人にそれぞれ少しずつ分配する。」(227o, 邦訳 p568)

⁸ 『日葡辞書』(原 378u, 邦訳 p578)には、「Sottoxita coto (ソットシタコト)」「Sottoxita fito (ソットシタヒト)」の形で掲出されている。前者は「少しの事」、後者は「普通の人、または、あまり値打ちのない人。」とあり、『日葡辞書』の時点で程度を表すことは疑いない。

⁹ 「チット/ソット」はきわめて類似した傾向をとるといえるが、細かく見れば「チツツツツ」はあるが「ソツツツツ」はなく、「ソツトバカリ」はあるが「チツトバカリ」はなく、「マチツト」はあるが「マソツト」はなく、「チットモ」はあるが「ソットモ」はない、などといった異なりもある。

¹⁰ 現代語では、いずれのパターンも「チョット」が排他的に用いられる。どこかの段階で、これらの用法が獲得されるのは確かである。

「チョット」の用例自体少ないため、偶々このような結果になったにすぎないかもしれない¹¹。

しかし、形式面から確実に言えることは、「チョット」が「チット／ソット」のバリエーション（＝程度副詞）であることを積極的に指示する理由はない、ということに限られる。

2.2.3 情態副詞としての解釈

ここまで意味を考慮から外して、用例数や形式的特徴といった客観的な側面から「チョット」と「チット／ソット」の関係について考察してきたが、「チョット」が「チット／ソット」のバリエーションであることを無批判に受け入れることはできない。果たして室町期の「チョット」を程度副詞とみるべきか、再考の必要があるだろう。

ここで、「チョット」の語構成に立ち返ってみよう。抄物には【擬態語＋と】という語構成をもつ副詞が非常に多い¹²。このような周辺の状況を鑑みる限り、「チョット」も【擬態語＋と】型の副詞と考えるのが穏当な解釈であろう。先学も、その点では見解が一致している。

【擬態語＋と】型の副詞は、それが音象徴性を失っていない限り¹³、本質的に情態副詞である。現代語においてはすでに音象徴性を失い、程度副詞として用いられている「チョット」であるが、抄物および同時期の文献に見られる「チョット」も同様であったと見てよいのか。

室町期の「チョット」は、＜程度小＞のような抽象的な概念ではなく、ある場面における、具体的な事物の様態・動作のあり方を音象徴的に表わした、情態副詞だったのではないだろうか。「チット／ソット」に対して、「チョット」に動詞修飾の用法しか見られないのは、そのことに由来するとも考えられる。また、室町期における「チョット」の用例の少なさは、それが特定の現象を表現する情態副詞であるが故に、限られた文脈にしか出現しなかったと考えれば説明がつく。

2.3 情態副詞「チョット」の確例

室町期の「チョット」が、情態副詞として用いられた可能性を示唆する例が、近世初期の和泉流狂言台本『狂言六義』に存在する。この資料における「チョット」の用例を、以下に示す。

- (16) 惣別、舟御光ト云もあり、又からかさ御光ト云モ、アルニよつて、ちよつと、御光カト思召て、うつらせられた物で、あらうト云 (狂言六義／小傘, 159 才)
- (17) 馬場のけト云内ニ、ちよつと樽ニ手をかくる (狂言六義／千鳥, 163 ウ)
- (18) それも女ニハ、みくるしからうト云テ、とかく下ニイテ、ちよつとのせうぶが仕タイト云 (狂言六義・連雀／187 ウ)
- (19) たいしの手ほこといふ事ハ、あそこな守屋をちよつとはさし、こゝなもりやをしくとはさし (狂言六義・太子手鉾／抜書 89 ウ)

¹¹ 表 1、2 に含んでいない『玉塵抄』の 5 例も、出雲 (1982) の言うように「全部動詞を修飾している」。

¹² 寿岳 (1951, 1956, 1962)、柳田 (1972)、劉 (2005)、平 (2008) ほか、抄物の擬態語を対象とした研究は少なくない。

¹³ なお、「チット／ソット」も元來は同じく【擬態語＋と】型の情態副詞であったと思しい (本稿注 4 参照)。寿岳 (1956) はこれについて、「中世の種々の文献に豊富なチトーチット、或いはシノニムとしてのソトーソット等を見ると、確かに音そのものの感覚は既に中世に於ても薄れつつあるように思われ (略) 真の擬声語の域を脱して、音象徴性をなくし」つつあるものとしている。

ここでは、一々の例への言及は避ける。このうち注目すべきは、(19)の例である。この例では、「チョット」と「シクト」が、動詞「刺す」をそれぞれ修飾している。

まず、この「シクト」について例を探してみよう。中世末期から近世初期にかけて、この例はほとんど文献上に姿を現さないが、大蔵流狂言台本『虎明本』に次の1例が見られる。

(20) 色鳥のさほなれぬこそ、さしよけれとゑんまのかほなぞ、しくとさす

(虎明本／ゑさし)

この語は動詞「刺す」を修飾して、その‘刺し方’を表現する、【擬態語＋と】型の情態副詞であることは疑いない。現代語に言う「チク（ツ／リ）ト」に値するものであると考えられる¹⁴。

(19)の「チョットはさし…シクトはさし」は反復的な表現であるから、[チョット：シクト]＝[程度副詞：情態副詞]という解釈は不自然である。「チョット」と「シクト」の意味の違いまでは、本稿では触れえないが、両者は似た機能を持つ語同士であると考えるのが妥当である。だとすればこの「チョット」も、「シクト」同様に‘刺し方’を音象徴的に表現した【擬態語＋と】型の情態副詞と捉えるべきであろう。

この例が、抜書に別掲載された節付け部分であるという点には、注意が必要である。固定的に伝承される狂言台本の節付け部分には、中世語の状態が残存することは、すでに多くの指摘がなされている。(19)の「チョット」はむしろ、中世末期の「チョット」が情態副詞であった可能性を示す例かもしれない。

2.4 仮説の提示

以上、「チョット」を取り巻く様々な状況を突き合わせてみると、室町期における「チョット」を必ずしも程度副詞と解釈する必然性がないことを述べてきた。ここまでの議論は実証的とは言えず、あくまで新たな解釈の可能性を追求してみたにすぎない。しかし、ある程度の方向が見えてきたところで、次のような仮説を立ててみよう。

(21) 室町期に副詞「チョット」は情態副詞であり、それが現代語のような程度副詞となったのは、その後が生じた意味変化の結果である。

本稿は意味の問題を論ずるものであるから、その手段として事例にあたり、用法を整理せねばならないことは言うまでもない。しかし文脈の解釈を客観的に行うことは困難である上、管見に入った限りの用例では、室町期の「チョット」を網羅できたとは言えない。そもそも、おそらく室町期の文献に「チョット」が登場することは稀であるため、「チョット」の意味について、その精確なところを明らかにするのは難しい。そこでここまで、あえて意味を考察の枠

¹⁴ 当時の「ちくちく」は、「少しづつ」（『日葡辞書』原47,邦訳p120）の意味で、『狂言六義』に見られる1例も、そのように解釈できる。なお、近世以降「シク／＼」は見られるが、これらはいずれも「泣く」「涙を流す」を修飾する情態副詞である。ただし、大蔵虎光が自身の狂言台本の詞章に対する注解・説明を記した『狂言不審紙』（1821～27頃）に「聾事狂言の盃するせつ、いばらをさかもきにしたト云。薔ハ角有もの也。夫を逆扱すれば、とげしゆく／＼として痛むの心なり。然バ強き酒を呑て、腹へシク／＼トせし事なるべし」との記述が見られる。この「しゆく／＼」は、「シクト」の「シク」と関係するものか。また「シク／＼ト」は、刺すような痛みを表現したもので、棘などで刺す場合の「シクト」が、それによって生じる痛みの表現にまで用法の幅を広げたものとも解釈できる。

から外して議論を組み立てることにより、いわば外堀を埋める形で、(21)の仮説を構築してきた。以下では、従来の見解とは逆に、「チョット」を情態副詞であることを前提として、その線で室町期の用例を解釈してみる。

3 室町期における「チョット」の表現範囲

3.1 形態素「チョ(ッ)」の表す範囲

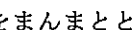
「チョット」が【擬態語+と】であるとすれば、問題が集約されるのは、形態素「チョ(ッ)」(以下、「チョ」とする)の表現しうる範囲である。そこで、「チョット」の考察に移る前に、まず擬態語「チョ」を形態素として含む、「チョチョット」「チョッチョット」「チョッチョット」(以下、これらを自由変異とみなし、一括して「チョッチョット」とする)の用法を確認しておこう。これらは限られた文脈の中で用いられる¹⁵。

- (22) 言ハ圭角ハアソココ、ノ角ヲ言ソ。雪カフリタマリテチヨチヨト圭角カ有トハ言ヘトモ (四河入海、六の三 45 才)
- (23) 一切草木ノ苗ノ土カラ角ノヤウニヲエ出タヲ甲(カウ)ト云ソ。菜 - 甲ト云ソ。野菜(サイ)ノ蔓(ナ)大根ナドノヲエツルヲ甲ト云ソ。甲々トツ、ケテ云ハ、チヨツチヨトヲエ出タ心ソ (詩学大成抄、二 5 才)
- (24) 芍芒ハ、草ノハジメテ生ジテ、サキエ角ノヤウニチヨツチヨトヅルナリヲ云ソ (詩学大成抄、五 9 才)
- (25) コハハ牛ノ角ノサキノヤウニ、チヨツチヨツト蓮実ノデタナリ (黄鳥鉢鈔、一)
*『時代別国語大辞典・室町時代編』
- (26) 牙ハ芽ソ。菫芽カチヨツチヨツト土ヨリイテ、拳メ薇ノ如ナソ (四河入海、十四の四 35 ウ)
- (27) 茶の葉のめづくってちよつちよとづるをほこと云心か (玉塵抄) *『日本国語大辞典』
- (28) 割愁心ニ物ヲ思テ色々ノコトラアンジテアルヲ、キリサイテスツルハアノ山ノチヨツチヨツト刀ノサキヲツキタテタヤウナデキリサイテノクルソ (詩学大成抄、二 18 才)

(22)から(25)の例を見よう。「チョッチョット」はそれぞれ、(22)「圭角」、(23)「草木の苗」、(24)「芍芒」、(25)「蓮実」の様態を表現する情態副詞である。これらはいずれも「角」に喩えられる、<尖ったもの>の先端が外に突き出した様を音象徴的に表現したものである。(26)では「牙」に喩えられるような、<尖ったもの>としての「菫芽」が、地面から突き出している様を、(27)では「茶の葉」から同じく「芽」が出た様子を「チョッチョット」で表現している。この例の「芽」は、「ほこ(矛)」という<尖ったもの>に喩えられている。(28)の「チョッチョット」が表現しているのは、「刀ノサキ」に喩えられるような山の突起の様態である。刀の先端が尖っていることは言うを俟たない。

このように、抄物の「チョッチョット」はいずれも、<尖ったもの>が突き出している様を表すものであって、その表現範囲はきわめて限定的である。抄物以外の用例を見てみよう。

¹⁵ 以下、先行研究および辞書類に挙げられた例を援用する場合は、出典を明示する。その場合、表記は出典先に従う。

- (29) 五梅ハ、筆ニテ、チヨツチヨツト付ソロヤウニ有 (宗溜日記・天正十五、三、廿)
*『時代別国語大辞典・室町時代編』
- (30) それがしが、にかわをまんまとときすまひて、ちよつ  と付てまいるぶん
じやに依て (虎明本・仏師)

(29)では、塗料を付ける(「五梅」は鉢の模様)、その付け方を「チヨツチヨツト」で表現している。「筆」の先という<尖ったもの>の様態そのものでなく、それによる動作の表現に擬態語「チヨ」を用いたものである。同じく(30)も「にかわ」を仏像に付ける様を表したもので、明記されないが、おそらくこの場合も筆による行為と思われる。同様の表現とみなしてよさそうである¹⁶。

以上、「チヨツチヨツト」は、いずれも<尖ったもの>の様態、もしくはそれによる動作のあり方を表現するもので、室町期における擬態語「チヨ」の表現範囲の狭さをうかがわせる。

3.2 情態副詞としての解釈

「チヨツチヨツト」の表す意味を参考に、本題である「チヨツト」について考察しよう。室町期の「チヨツト」の大半は、「チヨツチヨツト」と同じような文脈に用いられる。以下のようなものである。

- (31) 角ハ犀角ノ如ニ髪ヲ頭ニチヨツトユウヲ云 (四河入海、四の三 25 才)
- (32) 堅僂トハ冠モセヌ者ノ髪ヲチヨツトオリマゲテ置クニ依テ
(江湖風月集抄) *寿岳 (1959,1960)
- (33) 遠山脩眉韓カ天宇(ウ)浮フ——ヲ、天宇ハ天ト云心ナリ。宇ハソラノ心ソ。天ノソラニ眉カチヨツトミエタ如ソ(略) トライ山ヲ見レハ眉ヲアラワイタヤウナソ
(詩学大成抄、三 12 才)
- (34) 鼻ハ鼻ノサキカチヨツトアカリテカカウタソ (史記抄、十一 42 才)
- (35) 人ノハナノサキニシラ土ノチヨツトツイタソ (玉塵抄、三 58 才) *出雲(1982)
- (36) 人ノ鼻ノサキニ白土ガチヨツトツイタソ (玉塵抄、四八 18 才) *出雲(1982)
- (37) 一ツマミ程ノ頭巾ヲチヨツトキテイルソ (毛詩抄、十五 12 才)

(31)は、結った髪の様態を「チヨ」で表したもので、これは「角」に喩えられていることから<尖った>形であることがわかる。「角」で喩えられるものの表現に「チヨ」を用いる(22)~(25)の「チヨツチヨツト」の例に共通している。(32)も「髪」に関するもので、折り曲げることで、<尖った>状態にした髪の様態を表現したものである。(33)は、「トライ山」を「眉」に喩え、その先端の<尖った>様を「チヨ」によって表現している。また、(34)~(36)も、「鼻ノサキ」という<尖ったもの>に関する表現に用いられる。やはり同じ範囲で捉えてよさそうである。(37)も頭に小さく尖ったもの(=頭巾)>を載せている様を表現したものといえる。

¹⁶ 同様の場面で、「点水ハ、スミヲ物ニチヤツチヤツトツケタ如ナソ」(詩学大成抄、七 55 才)と「チャツチャツト」が用いられた例がある。

さらに、抄物以外で管見に入ったものとしては、以下のものがある。

- (38) それは明けても暮れても大雨が降れば、必ず山などが崩れ申す、その崩れ口に野老が
ちよつと現はれ、それが雨露に打たれ、ご存じのごとく野老には髭と申す物がござあ
る (謡曲・山姥)
- (39) ねよといへどもねずぞしづはら 哀にも枕のさきはちよつとして (守武千句／三)

(38)は、植物である「野老(ところ)」が顔を出している様を表現したもので、典型的にく尖ったもの>の様態を表す。(39)も、「枕の先」というく尖った>部分に関係する表現に用いられている。

以上を踏まえて、改めて『狂言六義』の用例を見よう。

- (40) たいしの手ほこといふ事ハ、あそこな守屋をちよつとはさし こゝなもりやをしくと
はさし (狂言六義／太子手鉢, 抜 89 ウ)

これは、「手鉢」という、く尖ったもの>による「刺す」という動作のあり方を、「チョ」で表現したものである。「チョッチョット」も、く尖ったもの>である「筆」による動作に用いられることは先に述べた。

以上が、「チョッチョット」同様にく尖ったもの>の様態・動作を表現する場合に用いられる情態副詞「チョット」の例である。

ところで、『日葡辞書』には「チョット」は掲出されていないが、「チョンギリト」「チョント」が、上に述べた「チョット」の意味にほぼ相当するものとして掲出されている。

- (41) Chonguirito. チョンギリト(ちよんざりと) 何か物が外側へ突き出しているさま。ある
いは、物にとがった所があるさま。 (原 50, 邦訳 p127)
- (42) Chonto. チョント(ちよんと) Chonguirito(ちよんざりと)の条を見よ。 (同上)

『日葡辞書』の編纂時における「チョット」の意味は不明であるが、「チョット」が程度副詞化していく中で、もともとそれが担っていた意味領域をこのような形式が担うこととなった可能性もある。この語にも「チョ」が含まれているのは示唆的である。今後の課題としたい。

3.3 その他の用例

上に述べたような領域に当てはまらないものもある。そうしたものは、管見に入った限り、以下の例にとどまる。

- (43) 聊__復解二__軽スシヲトヨマウカ、解(トイテ)軽(クモツ)一トヨマウカ、チヨ
ツト五字ノセタハ心エラレヌン (玉塵抄、九 5 才) *出雲(1982)
- (44) 臨時呼酒家軀令治葬便有二仙人二狗来.....死ル時トナツテ酒屋ウルイ年ヨリウハヲ呼
ヒヨセテ葬ヲトリヲサムル ヲヲサセタソ、ヽ(ソ)コエ仙人カ二人チヨツトキタソ
(玉塵抄、三六 4 才) *出雲(1982)

- (45) カシコナル処ヨリ、何人ヤラン、細雨ノ濛々トシテクラキカ中ヨリ、雨ヲツキヤブル
ガ如ク、チヨツト出来タルソ (三体詩抄、三・二、28)
- (46) 鉄.....コヽラニ云フタナタト云刀アリ、柄ヲコナガウシテ扉ノワラナドヲキルソ、ソ
ノツレナリ.....人有亡一、者意(オモウニ・シタカウ)其ノ隣ノ之子(コナラン)(ヲ)
入声ノ屑勻ニアリ、トナリ子物ヲイウタコトハヌススタヤウナソ、タチイハタラキシ
ヅカニチツトモヲドロカヌソ、物ヲヌススタ者ノヤウニナイソ、鉄ガチヨツトデキタ
ソ (玉塵抄、十六 21 ウ) *出雲(1982)
- (47) 久シウニ三年モアリテチヨツト帰タホドニ、学問ヲモシツラウト云タレハ
(詩学大成抄、一 41 ウ)

これらの用例に対する一々の具体的な分析は、本稿では保留せざるを得ない。ここでは、現時点での筆者の考えを示すにとどめておこう。(43)が程度副詞でないことは明らかである。「ノセタ」のは「五字」と量が決まっているので、「チョット」は程度を表すのではなく、動作としての、「のせ方」を表現したものと考えるのがよからう。

『時代別国語大辞典・室町時代編』は、(44)(45)の例を「動作が一瞬のうちにすばやくなされるさま」を表わす用法として挙げている¹⁷。また、出雲(1982)は(44)(46)の例に対して「急に、突然、という意に解され、チャットに近い」(p494)との解釈を与えている。「チャット」が「たちまち」の意味を表すことは、

- (48) 乍トハ、タチマチトヨムソ、チャツトアタヽカニナツタソ (詩学大成抄、五 27 ウ)
- (49) 忽忘ト云テチャツト物ヲワスルナリ (詩学大成抄、十 18 ウ)

といった例からも明らかであるが、たしかに(43)~(45)の例は、そのように解釈できそうである。亀井(1957)が、「チョット」の成立説として、「チツト/ソツト」に「チャット」を絡ませた背景には、このあたりの事情があるかもしれない(2.1、(1)参照)。これらの例は、「チョット」が<尖ったもの>を表現する、という仮説に修正を迫るものかもしれないが、「チャット」をはじめとした類音形式との混用の可能性があったことも否定できない¹⁸。

(46)(47)については、いま意見を持たないが、少なくとも、いずれも動詞修飾用法であることから、これらも情態副詞の枠内で捉えるのがよいのではないかと思われる。

3.4 仮説の妥当性

以上、室町期の擬態語「チョ」は<尖ったもの>の様態や、それによる動作という特定の文脈に用いられることを確認した。従って(21)で提示した仮説、すなわち室町期における「チョット」が情態副詞であった可能性を、積極的に否定する根拠はなさそうである。もとより意味の問題は、あくまで分析者の解釈に委ねられるため、これによって仮説が実証されたとはいえず

¹⁷ 『時代別国語大辞典・室町時代編』は、「チョット」の意味を、□動作が、一瞬のうちにすばやくなされるさま、□その事態が、ごくわずかながらしかと認められるさま、としており、本稿と同様に【擬態語+】型の情態副詞とみなすようである。しかし意味の解釈は本稿と異なっている。

¹⁸ 注 11 に挙げた、「チョッチョット」が期待される場面に、「チャッチャット」が用いられた例も併せて参照されたい。

ない。しかし、少なくとも、室町期の「チョット」を程度副詞とする従来の見解に対しては、再考の余地があることを示すことができたのではないかと思う。その意味で、本稿の目的は果たせたと言ってよい。

4 「チョット」の程度副詞化

さて、仮に本稿の仮説が正しいとすると、「チョット」が程度副詞化するのには、中世末期以後のことであることが想定されるが¹⁹、筆者は室町期の段階において、すでに変化の条件は整っていたと考える。結論から述べれば、「チョット」は漸進的な意味変化の末、結果的に「チット／ソット」との同義関係に達したわけではなく、ある段階において、それらのバリエーションとして同定されたと考えるのがよいのではないか²⁰。

室町期の「チョット」が情態副詞であったことは、ここまで述べてきたことから、ある程度蓋然的である。しかしその一方で、この時期の情態副詞「チョット」と程度副詞「チット／ソット」との間に、意味的な類似があったことも認めざるを得ない。

擬態語「チョ」の表現範囲は、一部の例外を除いて<尖ったもの>に関わる²¹。<尖った>部分は、その事物全体の中においては僅かな部分であり、‘程度’という観点から見れば<小>である。例えば、「鼻ノサキニ白土ガチヨツトツイタソ」という表現は、鼻の先に「白土」が付着している様が「チョ」という印象を与えるものであると同時に、付着の程度は<小=チット>である。循環論となってしまうが、その付着の程度が<小=チット>であるからこそ、情態としては「チョ」という印象を受けるのである。

したがって「チョット」と「チット／ソット」の意味は、その一部において混ざり合っている。それゆえ、具体的な文脈に据えられたときの「チョット」の意味が曖昧になるのは当然である²²。もとより語の意味は、文法体系や音韻体系に見るような排他的関係において捉えることは不可能であり、本稿で《情態副詞か程度副詞か》、という二元的対立に問題を落とし込んだ背景は、このような意味の複雑性・多面性を避ける目的があった。

その上、「チョット」と「チット」は形態的にも類似している。このような関係が、「チョット」の程度副詞化に無関係であるとは考えにくい。本来情態副詞であった「チョット」が、類義類音関係にある程度副詞「チット」へと合流していく流れは十分に考えられる。つまり変化の条件は、室町期においてすでに整っていたといえよう。

¹⁹ 『志不可起』(1727)に、以下の記述が見られる。「ちと 少(スコシ)ノ事ヲちとト云ハ、自然和語(シゼンワゴ)トキコヘテ不レ大ヲちいさしと云(略)ちとト云ヲちくとトクノ字ヲ入猶ソレヲちつくとトモチつくりトモチちつとナド云モキ、ニクシ亦ちよとト云もちとト云ニキコユ是ヲモチよつとナド云ちよくとちよつくりとナド云モ俗語(ソクゴ)ナルベシ」。江戸中期頃には、すでに「ちよっと」と「チット」が同じものと捉えられていたようである。

²⁰ もちろんここでは、「チット／ソット」の傍形として「チョット」が生れたという可能性は排除している。

²¹ なお、「チャット」と同じように解釈しうる、「すばやさ」を表す例も、時間という観点から捉えれば、その‘程度’はやはり<小>である。

²² 『日葡辞書』の補部に「Chocchoto(チョッチョト)。副詞。少しずつ」(339u,邦訳 p126)とあるのは、このような事情によるものかもしれない。つまり、実際の用法としてはこの語がある情的意味を持つ情態副詞であっても、この書の編者の解釈では、より抽象的な一面が捉えられたのかもしれない。ただ、寛文10(1670)年刊の『惠輪永明禅師代語抄』に「百味ノ余食カチヨツ／＼ト備ツテ万事ニ不足欠路カナイソ」との例があり、江戸初期には『日葡辞書』にあるような用法が存在していたらしい。従って、『日葡辞書』成立の時点で、すでにこの語が抽象的な<程度>を表わすようになっていた可能性も否定できない。

ここに述べたのはあくまで変化の‘条件’に過ぎず、その要因は他にあると考えるべきであろう。「チョット」の変化については、本稿の主旨からは逸脱するため、具体的に論証することはできない。ただ、「チョット」の用法が、室町期の用例のような特定の場面に密着したものである以上、そこから一足飛びに「チット／ソット」に同定されたということは考えにくい。用法の狭さは、むしろその用法を固定させることにつながるであろう。

変化の要因として素朴に考えられるのは、「チョット」の表現範囲の拡張である。「チット／ソット」と重なる意味領域が増加したことにより、変化が推進されたのではないか。あるいは例外として処理した(43)～(47)の例を変化の過渡的段階として想定することも可能かもしれないが、本稿では差し控えたい。このことを論証するには、江戸期の「チョット」の精査が必要である。稿を改めたい。

5 まとめと今後の課題

本稿では、従来<程度小>を表わす程度副詞と考えられてきた室町期の「チョット」について、これが【擬態語＋と】という語構成をもつ情態副詞であるとの仮説を立て、その蓋然性を示してきた。また、現段階では推測の域を出ないが、その変化の方向に対する私見を述べておいた。

本稿は、大きな見通しを述べたもので、細部にわたっての実証はすべて今後の課題である。本稿の内容をより精密にするという意味では、さらなる用例の収集が必要となろう。抄物に見られる語の意味を、原漢文から逆に探りうることは、方法論として周知のことである。「チット／ソット」などの程度副詞と「チョット」が、原文にどのように対応するかを明らかにすることは、客観的なアプローチとして有効である²³。相補分布的な対応が見られれば、本稿の主張がより補強されることとなる。そのためにも、より多くの用例を比較する必要がある。

また、本稿では単純に「チット／ソット」との対照を通して、「チョット」がそれらと異なる性質を持つことを述べてきた。しかし、(共時的な)意味の問題は、作業仮説としての「体系」の下に把握することが肝要である。本稿では程度副詞としてほぼ同義的に扱った「チット」と「ソット」にも、実際には使用上の差異があるかもしれない。「チョット」の程度副詞化という通時的現象は、そうした構造の中に組み込まれる、という観点から考察していく必要がある。

このような視野から程度副詞の歴史を眺めてみれば、問題はさらに広がりをもつ。たとえば、近世以後、「チョット」が程度副詞として現代語に残る一方で、室町期に程度副詞であった「ソット」が、現代語では情態副詞として用いられる。これは、「チット」「チョット」という「チ」系の語が<程度小>を表わす語彙体系としての契合を強める一方、「ソット」は「ソロソロト」などに引かれ、再び情態副詞としての用法を取り戻していったとも考えられる。

つまり、本稿ではその詳細を述べるができなかった「チョット」の意味変化に関しては、<程度小>を表す語彙グループの歴史的変遷の一部として捉えるべきである。その点で本稿は、中世以降における<程度小>を表す程度副詞群の変遷を探る、その足がかりとして位置付けられるものである。

²³ ただしこの方法はすべての場合に可能なわけではない。本稿の用例のみでは、説明の段階で付加されたものが多く、データが取れない。なお、「ちと」が幅広い対応を見せることは、すでに寿岳(1951)によって指摘されている。

使用テキスト

1. 句双紙抄 『新日本古典文学大系 53 中華若木詩抄・湯山聯句抄』 岩波書店
 2. 中華若木詩抄 『新日本古典文学大系 53 中華若木詩抄・湯山聯句抄』 岩波書店
 3. 三体詩抄 『抄物小系 9 丁丑版 三体詩抄□~□』
 4. 詩学大成抄 『新抄物資料集成 第1巻』 清文堂出版
 5. 史記抄 『抄物資料集成 第1巻』 清文堂出版
 6. 四河入海 『抄物資料集成 第2~5巻』 清文堂出版
 7. 蒙求抄 『抄物資料集成 第6巻』 清文堂出版
 8. 毛詩抄 『抄物資料集成 第6巻』 清文堂出版
 9. 杜詩統翠抄 『続抄物資料集成 第1~3巻』 清文堂出版
 10. 漢書抄 『続抄物資料集成 第4巻』 清文堂出版
 11. 古文真宝抄（桂林徳昌講一元光演聞書） 『続抄物資料集成 第5巻』 清文堂出版
 12. 古文真宝抄（彦龍周興講某聞書） 『続抄物資料集成 第6巻』 清文堂出版
 13. 山谷抄 『続抄物資料集成 第6巻』 清文堂出版
 14. 荘子抄 『続抄物資料集成 第7巻』 清文堂出版
 15. 百丈清規抄 『続抄物資料集成 第8巻』 清文堂出版
 16. 和泉流狂言六義 『天理図書館善本叢書 23,24 狂言六義 上,下,抜書』 八木書店
 17. 大蔵流虎明本 『大蔵家伝之書 古本能狂言 第1~3巻』 臨川書店
 18. 狂言不審紙 『日本庶民文化史料集成 第四巻 狂言』 三一書店
 19. 謡曲 『日本古典文学大系 40,41 謡曲集 上・下』 岩波書店
- 2,6~9,10~16,17,18 は、用例の検索にあたって索引を利用した。

参考文献

1. 出雲朝子（1982）『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』 桜楓社
2. 亀井孝（1957）「言語史上の室町時代」（図説日本文化史大系 7）
3. 亀井孝（1986）『言語文化くさぐさ 亀井孝論文集 5』 吉川弘文館 □2を加筆したものを所収
4. 亀井孝ほか（1966）『日本語の歴史 別巻 言語史研究入門』 平凡社
5. 寿岳章子（1951）「言語観察の対象としての抄物の一意義—擬声語と翻訳—」（国語国文 20-4）
6. 寿岳章子（1956）「擬声語の変化」（西京大学学術報告・人文 7）
7. 寿岳章子（1959,1960）「抄物の擬声・擬態語彙」（国語国文学会誌（京都府立大学）1,2）
8. 寿岳章子（1962）「抄物における擬声語の使用率」（計量国語学 22）
9. 寿岳章子（1983）『室町時代語の表現』 清文堂出版 □5,6,7,8を所収
10. 平弥悠紀（2008）『『中華若木詩抄』の音象徴語』（同志社大学日本語・日本文化研究 6）
11. 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
12. 三宅節子（2003）「程度小を表わす副詞の一研究—「すこし／ちょっと」を対象に—」（日本語・日本文化 29）
13. 劉玲（2005）『『三体詩幻雲抄』に見える擬音語・擬態語』（日本語と日本文学 41）
14. 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』 宝文館

付記 本稿は科研費（特別研究員奨励費 21-55272）の助成を受けたものである。

